元～8

「城を歩く会」８月夏季研修会

# 慶長江戸図と寛永江戸図を読む

## ～巨大都市「江戸」の成立と拡大～

令和元年８月２１日　大田区立入新井集会室　　山岸弘明

＊明治維新時の住区分別人口総括表（推定）

| 住区分 | 人口 | 面積 | 人口密度 |
|---|---|---|---|
| 武家地 | 65 万人 | 38.7 ㎢ | 16,800 人／㎢ |
| 寺社地 | 5 万人 | 8.8 | 5,700 |
| 町人地 | 60 万人 | 8.9 | 67,300 |
| 合計 | 130 万人 | 55.4 | 23,500 |

江戸時代の世界都市人口ランキング

| | |
|---|---|
| ①江戸 | 100 万人（江戸中期） |
| | 120 万～130 万人（後期） |
| ②ロンドン | 86 万人（1801 年） |
| ③パリ | 54 万人 |

＊江戸の住区分別面積　総面積＝武家地＋町人地＋寺社地＋その他

正保年間（1647 ころ）48.9 ㎢＝34.1（77%）4.3（10%）4.5（10%）1.1（3%）

享保 10 年（1725）　69.9 ㎢＝46.5（65%）8.7（13%）10.7（15%）4.0（5%）

＊「宗門人別帳」による町方人口　総人数（男女）＝町方支配＋寺社支配門前地

享保 18 年（1733）　536 千人（340、196）、476、61（武士を除く）

天保 3 年（1832）　546 千人（298、248）、475、71（　〃　）

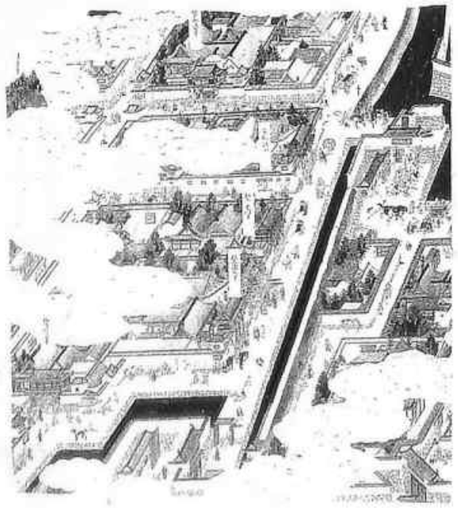
嘉永 6 年（1850）　575 千人（295、279）、492、53（　〃　）

「城を歩く会」当面のスケジュール（詳細は「会報」を参照ください）

9 月 10 日（火）　「青べか」の町を歩く～「浦安郷土資料館」とその周辺～

10 月 1 日（火）　品川宿を歩く

11 月 13 日（水）　バス研修会



5月定例会
アルバム　バス
チバニアン、大多喜城
万木城

6月25日　朝日新聞

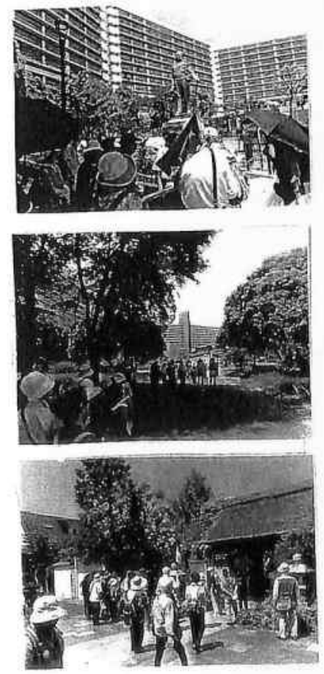
## 「チバニアン」危機　市原市　条例案で対抗

千葉県市原市にある地磁気逆転の地層を国際機関に申請する手続きが進まなくなっていた問題で、市は24日、「研究目的のための立ち入りなどを保障する条例を制定する」と発表した。申請に反対する男性が地層のある土地の賃借権を取ったことに、市が対抗措置を打ち出した形だ。

約77万年前に地球の磁場が最後に逆転した痕跡が確認できる市原市田淵の地層「千葉セクション」をめぐっては、日本初の国際標準模式地（GSSP）にしようと、研究グループが国際地質科学連合に申請中だ。認められれば、約77万～126万6千年前の地質時代が「チバニアン（千葉時代）」と名づけられる。

だが、反対する「古関東深海盆ジオパーク推進協議会」の楡井久会長が土地の一部で賃借権を取ったことから、申請の条件となる「研究のための立ち入りや試料採取の保障」ができなくなった。市や研究グループは、その土地の地権者とも交渉できなくなり、手続きが暗礁に乗り上げていた。

地層の周辺地域は昨年10月、国の天然記念物に指定され、市は今年3月、管理団体になっている。市は「地層は極めて価値が高く、世界的な学術研究の進展に貢献する」と評価。対策を検討した結果、「地磁気逆転地層の試料採取のための立ち入り等に関する条例」案をまとめた。「試料採取のための特定地域への立ち入りを拒みまたは妨げてはならない」「妨害した者は5万円以下の過料」などの条文も盛り込む予定だ。9月市議会で条例案可決を目指すという。（中山由美）



6月定例会
アルバム
向島

徳川家　武家・水戸（官職）藩・三家・三五万石。明17・7・7侯爵―昭4・11・18公爵。
◉治保―治紀―斉脩―斉昭―慶篤―昭武―篤敬―隠居―斉修―斉正―水戸の徳川家である。家康の十一男・頼房の後裔で、斉昭は幕末の尊王攘夷派の雄主で、文武を奨励した。彼の七男が、後に十五代将軍となる慶喜である。昭武（斉昭十八男）は箱館戦争に軍功があった。隠居は日本赤十字社社長、貴族院議長を歴任。また光圀が着手した『大日本史』を完成させた。なお圀順夫人茂子は徳川慶喜十一女。

徳川家　武家・将軍家・府中＝静岡（駿河）藩・七〇万石。明17・7・7公爵。
◉家斉―家慶―家定―家茂―家達―家正―恒孝
将軍家である。初め松平を称し、三河に勢力を伸長。家康は信長、秀吉と結んだ後、天下を統一した。十五代将軍慶喜（徳川斉昭七男）は一橋家より入り大政を奉還。家達は駿河に封ぜられ、イギリス（留学。後に三十年間貴族院議長を務めた。家正は外交官となり、カナダ・トルコ公使をつとめ、最後の貴族院議長となった。

徳川家　武家・徳川宗家別家。明35・6・3公爵。
◉慶喜―慶久―慶光―慶朝
十五代将軍慶喜を祖とする。慶応三年大政を奉還したが戊辰戦争となり、明治元年に謹慎。家達に家名を譲り、静岡に隠退する。明治三十五年、特旨を以て公爵を授けられ、分かれて一家を立てた。慶久夫人実枝子は有栖川宮威仁親王第二女子。慶久女子喜久子は高松宮宜仁親王妃。

徳川公爵　3家

安政3年十現代図

## 水戸徳川家下屋敷兼蔵屋敷庭園～6月定例会での質問にお答えします～

1）徳川水戸家蔵屋敷、本邸から区立墨田公園（墨田区向島1丁目）へ

＊寛文年間　明暦の大火後の江戸市街拡大で向島が起立

＊旧徳川水戸藩下屋敷（蔵屋敷＝小梅御殿）

元禄6年（1693）御三家水戸家2代徳川光圀の養嗣子（兄頼重長男）綱条（つなえだ）の時、小石川川端屋敷上げ地にともなう代地として拝領。後船蔵地添え地で23，110坪余が定まる。通称小梅御殿。明治維新で一旦は上げ地されたが、明治、大正期の徳川水戸侯爵→公爵本邸として復帰。大正12年関東大震災で全壊（焼失？）、東京市新設の墨田公園の一部に組み込まれる

②下屋敷＝江戸大名家の控え屋敷、別荘

蔵屋敷＝江戸大名が国元からの米穀、薪炭などの貯蔵倉庫を置いた屋敷（江戸、大坂、大津）。国元との海路、陸路（水戸街道）に便利な地を選定。

③最後の将軍で水戸家出身の徳川慶喜も、明治35年特旨公爵、東京復帰後、趣味の写真現像などでしばしば立ち寄った

2）明治図に見る徳川水戸邸

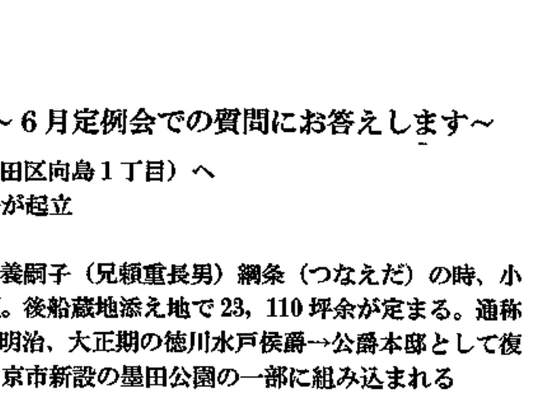
①江戸時代の小梅御殿庭園＝潮入り池泉回遊式庭園。池は細くややこじんまり

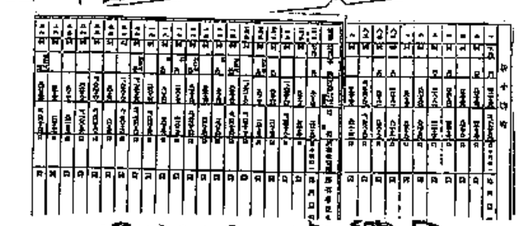
現在の墨田公園＝池泉はや昭和の池泉と洋風公園

②実測図から水戸藩蔵屋敷と明治本邸を推定

全体像＝船着き場と船蔵、正門、本館、潮入り回遊式庭園、荷揚げ場、蔵地、家臣屋敷、長屋下屋敷小梅御殿の構成＝玄関、表向き、私邸中奥、来客座敷、奥向き、明治の増築洋館

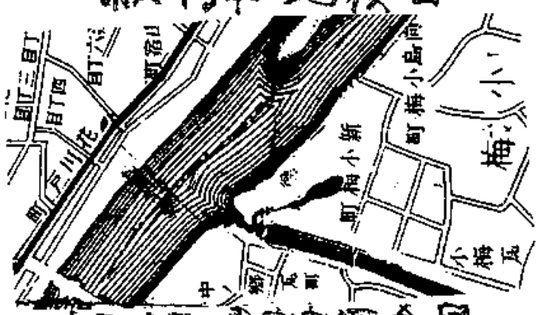
明治4年 東京大絵図





明治45年 地積図

明治43年 東京東部実測図



大正3年 東京市街全図



## 江戸城関係年表

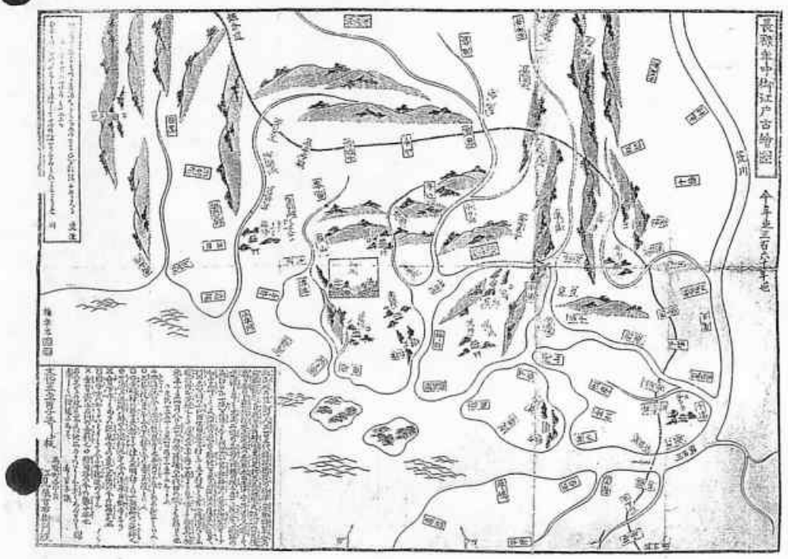
| | |
|---|---|
| 保元ころ1156～ | 江戸重継、現在皇居東御苑に居館を構える |
| 治承4年1180 | 重継の子・江戸重長、源頼朝の挙兵に際し、始め平氏に参陣したが、のち頼朝の旗下に入り、武蔵国総検校職を与えられる |
| 延元23年1366 | 江戸氏、平一揆に加担して敗れる。江戸城を廃して多摩郡に移り、喜多見氏と改姓 |
| 長禄元年1457 | 関東動乱おこり、太田道灌、江戸城を築く |
| 応仁元年1467 | （応仁の乱、戦国時代始まる |
| 文明9年1477 | 豊嶋泰経の江戸城攻めに対抗して、道灌、豊嶋氏の諸城を落とし入れる |
| 〃　18年1486 | 道灌、主君の上杉定正に暗殺される。江戸城は上杉氏に帰属する |
| 永正2年1505 | 上杉朝良、山内上杉に敗れ、江戸城に隠退 |
| 大永4年1524 | 北条氏綱、江戸城を攻め落とす |
| 永禄11年1568 | （織田信長、足利義昭を奉じて京に入る |
| 天正10年1582 | （本能寺の変。信長自害 |
| 〃　11年1583 | （信長の後継者・豊臣秀吉、大坂城を築く |
| 〃　14年1563 | （徳川家康、秀吉に臣従する |
| 〃　18年1590 | 秀吉の小田原征伐で、家康ら江戸城を攻略。家康、関東移封、江戸に入る |
| 文禄元年1592 | 家康、西の丸拡張工事 |
| 〃　2年1593 | 本丸、二の丸、三の丸、吹上の原形工事に着手 |
| 慶長3年1598 | 増上寺を移し、徳川家菩提寺とする |
| 〃　5年1600 | 家康、関ヶ原の合戦に勝利、天下人となる |
| 〃　6年1601 | 江戸城下の屋根を茅葺きから板葺きとする布達を出す |
| 〃　8年1603 | 家康、征夷大将軍に任じられ、江戸幕府開く、神田山を取り崩し市街地を造成<br>外様大名に江戸の邸地与える |
| 〃　9年1604 | 江戸城拡張工事のため、西国24家に石材、木材の運搬を命じる |
| 〃　10年1605 | （家康、将軍職を秀忠に譲り、なお大御所として実権を握る。駿府・江戸2元政治 |
| 〃　11年1606 | 藤堂高虎、江戸城総縄張り、本丸完成、秀忠入る |
| 〃　12年1607 | 初代5重天守、大手門など完成 |
| 〃　13年1608 | 外郭の北墨、堀を構築 |
| 〃　16年1611 | 西の丸造営を奥羽、関東、信濃諸侯に命ず |
| 〃　17年1612 | 江戸城外郭の土墨を石積みにするため石材輸送を命ず |
| 〃　19年1614 | 西国大名に本丸、二の丸、三の丸石垣修復を命ず |
| 元和元年1615 | （家康、大坂の陣で豊臣氏滅亡させる、武家諸法度、禁中公家諸法度を制定 |
| 〃　2年1616 | 徳川家康没 |
| 〃　4年1618 | 西の丸の堀拡張を関東諸大名に命ず |
| 〃　6年1620 | 西の丸を修築し、前将軍の居所とする。本丸殿舎、天守閣を修築 |
| 〃　9年1623 | （家光、3代将軍となる |
| 寛永2年1625 | 天海を開山に将軍菩提寺として寛永寺を創建 |
| 〃　6年1629 | 家光、総構え拡張工事開始、石垣1750間、4万4533坪、助役高300万石に及ぶ |
| 〃　13年1636 | 城普請総仕上げ、主郭、内郭、外郭完成 |
| 明暦3年1657 | 明暦の大火で市街の大部分と城内天守、本丸、二の丸などを全焼、焼死者10万 |
| 万治年間 | 江戸市街を広げ、防火対策すすめる |
| 文久3年1863 | 西の丸、ついで本丸、2の丸を焼失、以後本丸御殿再建せず将軍は西の丸へ移る |
| 明治元年1868 | （鳥羽伏見の戦いで徳川慶喜敗走<br>江戸開城。江戸を「東京」と改称、明治天皇西の丸に入る |
| 〃　2年1869 | 東京遷都、21年皇居を「宮城」と呼ぶ |
| 昭和20年1945 | 太平洋戦争の東京空襲で明治宮殿を全焼。日本無条件降伏 |
| 〃　23年1948 | 宮殿の呼称を「皇居」と改称、天皇は国民の象徴となる |

# 中世、太田道灌と小田原北条支城時代

## ～関東の１地方城下町～

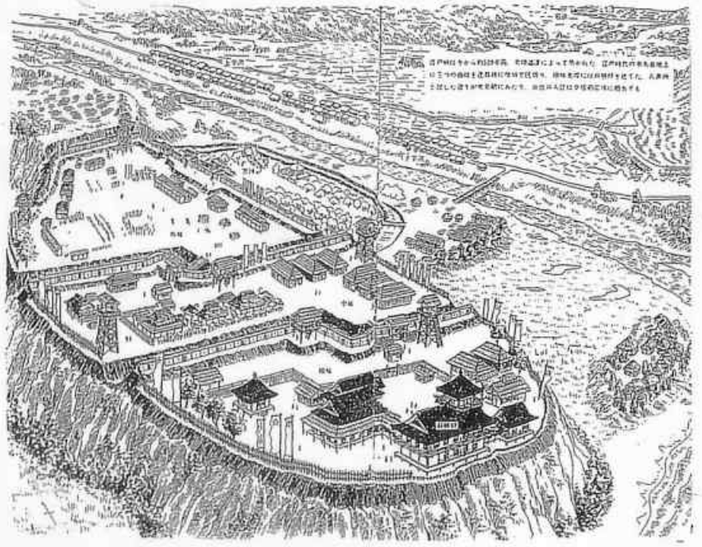
### ❶長禄江戸図（1457～60）＝大田道灌時代の江戸城

①保元ころ江戸重継、麹町台地先端、現在皇居東御苑（江戸城本丸）の高台に居館を構築
②関東の動乱の長禄年間、関東管領執事・扇谷上杉定正の家宰・太田資長（道灌）が江戸氏居館跡に江戸城を築く。比高 20m、城塁を重ねた要害。
のちの本丸台地を３つの曲輪に区切り、外曲輪（３の丸）中城（２の丸）根城（本丸）とした。現在富士見櫓あたりに天守前身ともいえる３重亭「静勝軒」を立てた。
わが庵は松原つづき海近く、富士の高根を軒端にぞみる
③道灌の死後、小田原北条氏の支城となり、それなりの繁栄をみせたが、あくまでも関東の１地方都市に過ぎなかった



← 長禄江戸図

大田道灌と江戸城

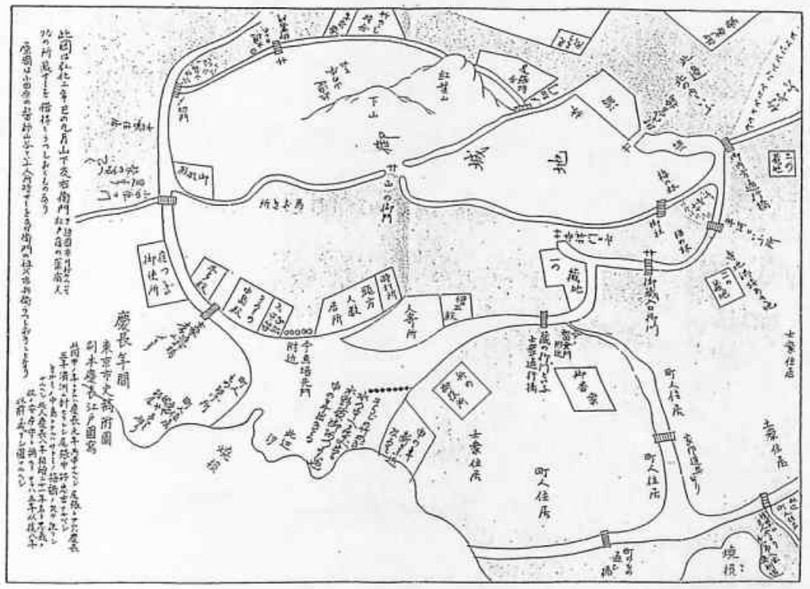


# 天正 18 年、徳川家康江戸入り時代

## ～豊臣政権下の最大大名家だが～

### ❷別本慶長江戸図＝慶長７年（1602）ころの江戸城

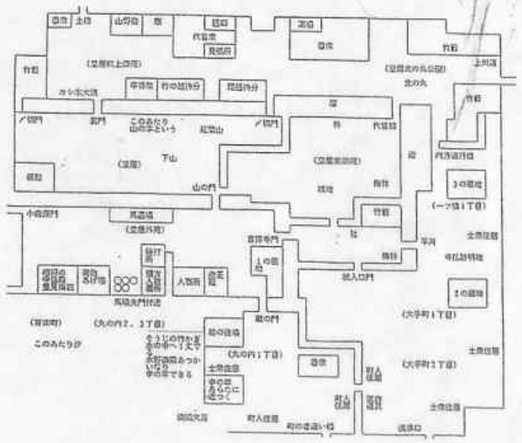
①天正 18 年徳川家康入り当時の江戸城は石垣もなく荒れ果て、建物も民家のような田舎屋であったといわれる。安土城や大坂城などとくらべられないみすぼらしい城だった。
②豊臣政権下最大大名家城下としての家康の城下経営
家臣団の屋敷割り、町人の町割り
江戸築城のための水路道三濠の開発
行徳から塩輸送路小名木川の開削
上水路、神田上水の開削
東海道を江戸基点に整備



◀豊臣秀吉(1537～98) 尾張中村に地侍木下弥右衛門の子として誕生。今川氏の武将に仕え、のち織田信長に仕え、羽柴秀吉と名乗って近江長浜に居城。本能寺の変後に全国を統一し、太閤検地や刀狩などをおこなった。後陽成天皇より豊臣の姓を賜る。朝鮮侵略をおこない、1598年、病没。

別本慶長江戸図

◆徳川家康像（大阪城天守閣蔵）
天下人となった家康は日本一巨大な近世城郭である江戸城を築いた。そしてその天守も極めて巨大であったと推測される。



# 慶長８年、家康江戸開府時代

## ～天下普請による日本「覇都」の発展～

### ❸慶長江戸図＝慶長 13 年（1608）の江戸城

①慶長５年関ヶ原の合戦勝利、８年家康征夷大将軍に就任、江戸幕府開く
②１大名居城から、幕府所在地としての江戸城へ
　天下人にふさわしい最大規模城郭の築城
　全国の大名への賜邸と藩邸建設
　家臣団（旗本、御家人）の編成と集住
　建設労働力確保や消費都市として商工業者の集住、物流仕組みの整備
③慶長８年神田山を取り崩し、その土で日比谷入り江を埋め立てる。
④慶長 11 年池田輝政、加藤清正、福島正則、黒田長政ら西国筋外様大名に巨石調達が命じられ、翌 12 年本丸、天守台を皮切りとした江戸城の本格的築城工事を開始。慶長 13 年図はおよその姿を伝える。

◆徳川秀忠像（部分）
家康の三男で第二代将軍。忠実な後継者として幕府の体制を整える。家康の築いた天守を取り壊し、元和度の天守を建てた。

慶長13年慶長江戸図全



# 寛永 13 年、家光総仕上げ工事時代

## ～豪華絢爛、壮麗都市の完成～

❹武州豊嶋郡江戸庄図＝寛永９年（1632）江戸図
❺江戸図屏風図＝寛永９年ころの江戸城と城下屏風絵
❻新添江戸図＝明暦３年（1657）大火前の江戸図

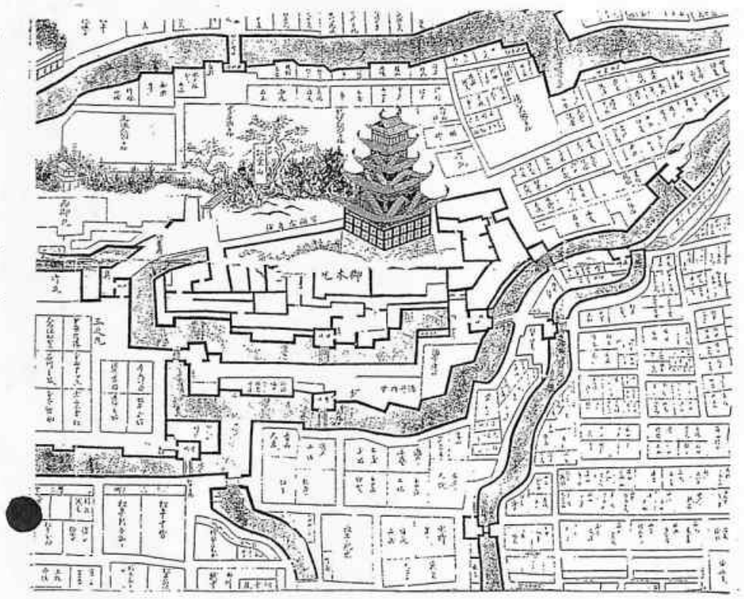
①寛永 13 年、３代将軍家光による総仕上げ、外堀工事が終わり、日本最大の巨城・江戸城が完成する。
②武州豊嶋郡江戸庄図、江戸図屏風は外堀工事前の江戸城下をえがく。
　共通性が高く、屏風絵は寛永図を参考にしたとの指摘もある。
③新添江戸図は外郭工事が完成後をえがく。この年１月「明暦の大火」がおこる。江戸城と城下の大半を焼失、死者は 10 万人を数えた。

## 国立歴史民俗博物館蔵「江戸図屏風」

①国宝。通常は歴博地下収蔵庫に保管、特別展以外公開なし。
②紙本金地著色６曲１双の本間屏風
③制作年代、作者未詳

江戸城（左双の半分を占める）
①２代天守（江戸城のシンボル）＝元和８年、２代将軍秀忠造営。独立式５重５階地下１階、金シャチ、飾り破風、層塔型。寛永 14 年家光が３代天守に建て替え。明暦大火で焼失、天守台を再建したが上物は上がらず、のち８代将軍吉が現存天守台を築かせるが天守の構築に至らなかった。
②本丸殿舎＝将軍、御台所居所で表御殿（政治）、中奥（私邸）、大奥からなった。初代殿舎は慶長 11 年竣工、絵図はこのときのもの。寛永 16 年大奥から出火全焼、家光が翌年２代殿舎を再建して復帰した。本丸御殿の歴史は火事の罹災史、江戸時代を通じて５度焼失、建造は７回に及んだ。最後の本丸御殿は文久３年に焼失、以後再建されることなく本丸機能を西の丸に移した。
③本丸殿舎群には玄関、大広間、白書院、黒書院、御座の間、大奥主殿など大小建造物が連続する。格式の高い赤い銅瓦屋根、檜皮葺きの淡茶色、瓦屋根は深青色であろうか。
④西の丸＝慶長 15 年の江戸城工事で奥羽、関東、信州諸侯担当した。16 年初代殿舎竣工、家康の隠居城とされたが本人は駿府で二元政治を展開、実際に居住することはなかった。江戸時代最後の本丸として 15 代将軍慶喜が逃げ帰り、慶応４年に開城された。前面はいかめしい石垣作りで２重橋が見える。裏側桜田濠一帯はゆるやかな傾斜をもったはちまき土居で、西方極楽の将軍隠居城、やすらぎの地になっている。

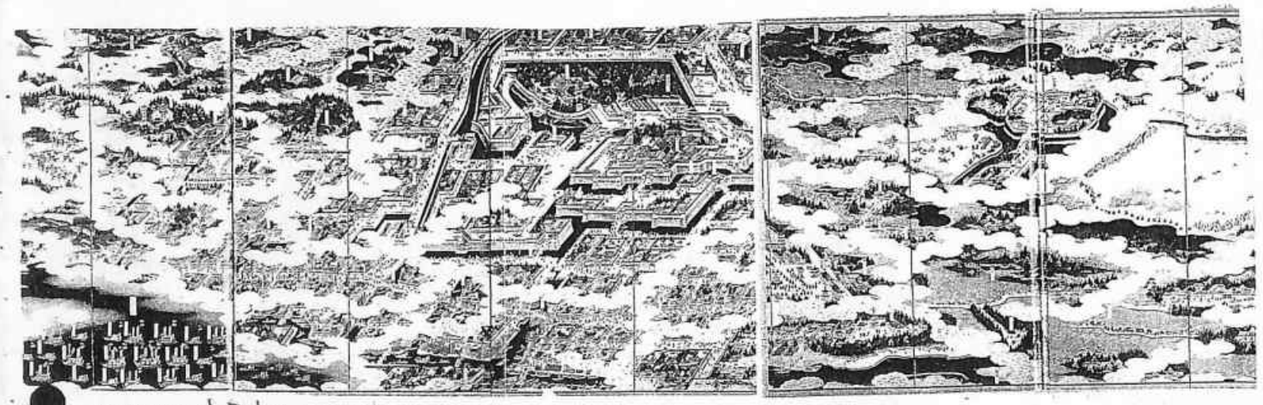
武家屋敷
⑤松平伊予守（福井越前家）上屋敷＝将軍を迎えるお成り門とお成り御殿、主人が利用する櫓門、周囲を白壁塀で囲いすみ櫓、庭園がみえる。
⑥尾張、紀伊、水戸徳川御三家屋敷
⑦外桜田外様雄藩、上杉、毛利、伊達家の門構え
⑧水戸藩下屋敷、加賀前田家下屋敷
増上寺、寛永寺、浅草寺、日本橋のにぎわい



◆徳川家光像（金山寺忠）
幕藩体制確立期にあたる第三代将軍。父・秀忠の死去後、三度目となる寛永度の天守を造営した。祖父家康を敬い、日光東照宮の脇に自らの廟を建てる。

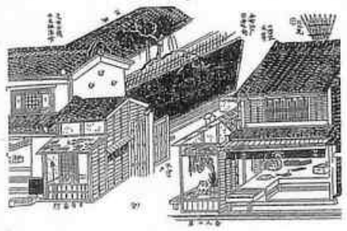
寛永江戸図

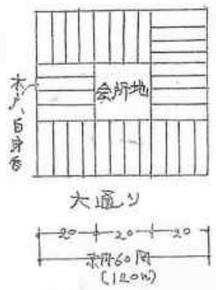
江戸図屏風



明暦江戸図

▶日本橋の棒手振（歌川広重筆「東海道五十三次」）　常設の店舗を持たず、天秤棒をかついで商品を売り歩く小売り商人を棒手振とよび、多くは裏店借の者たちであった。






町割りと会所地



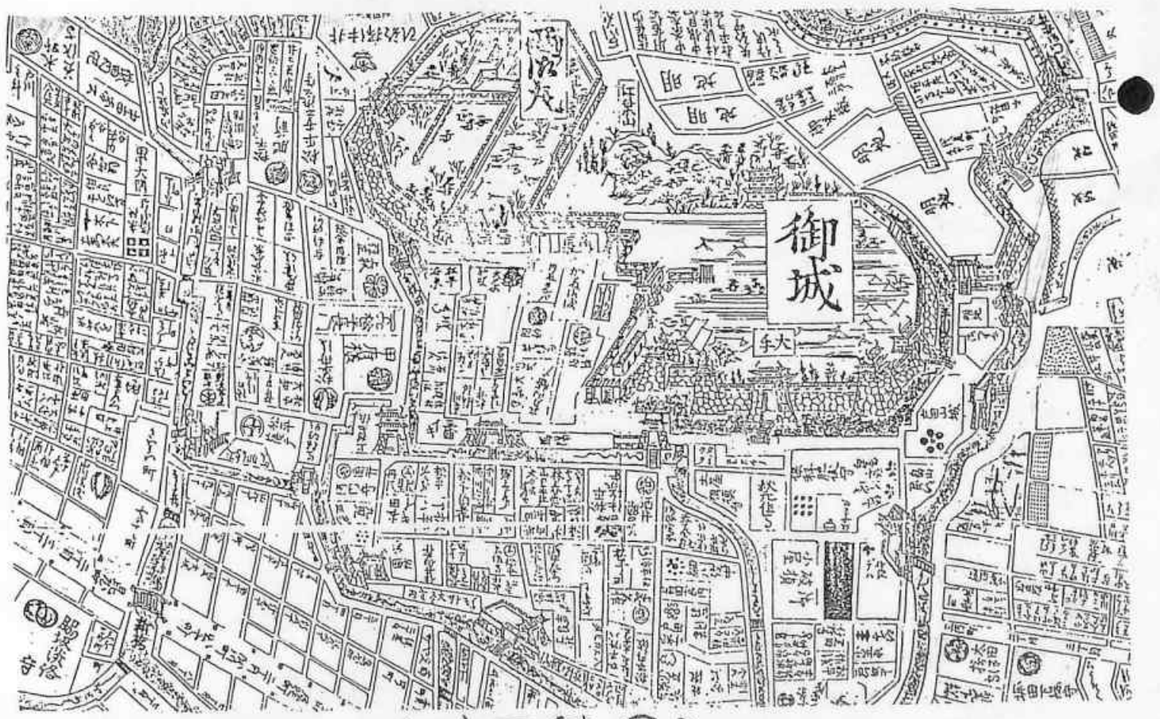
# 江戸300年、花の元禄時代

## ～人口100万、世界最大都市へ～

### ❼江戸図鑑綱目＝元禄2年（1691）の江戸図

①明暦の大火のあまりにも大きな被害にこりた幕府は数々の防火、延焼対策に乗り出す。
②江戸城内吹上庭の御三家邸を城外に出して空間を広げ、築地など未開発だった隅田川周辺を整備し、両国、向島、錦糸町などの隅田川対岸を江戸市街に組み込んだ。また周辺の大名屋敷、寺院を移転して空地を確保した。
③江戸城馬場先門など明かずの門を開き、隅田川に永代橋、新大橋を架橋して脱出路を作った。街中には火除け堤、広小路、火除け地を設けた。
④翌万治元年幕府は江戸城と武家地を対象とした定火消を設置、大名は抱えの火消し、町屋もいろは47組の町火消を設置して自衛した。
⑤拡大の一途を続けた江戸市街、元禄時代人口100万を数え、世界最大都市になった。
⑥天保のころ、大飢饉で他国生まれの百姓たちが大量に流入、幕藩体制の再建をめざす老中水野忠邦は人別改めを強化して強制的に帰農させようとしたが成功することなく失脚する。以後幕政改革は行われず幕末の動乱へ突入する。
⑦慶応4年鳥羽伏見の戦いに敗れた徳川慶喜が船で大坂城を脱出、4月江戸城が無血開城されて、15代275年間続いた徳川氏の江戸支配が終わった。
⑧明治2年東京遷都、西の丸をもって皇城と定められ明治天皇御所とされたが、廃藩置県後の6年皇城女官部屋から出火焼失、明治21年明治宮殿竣工で復帰された。大正天皇、昭和天皇をへた令和元年5月、平成天皇の退位で即位された今上天皇は、昭和43年建造の昭和宮殿を御所に、平成上皇は赤坂の新居所に退かれた。

以上




江戸図鑑綱目

夏季研修会レジュメ　　保科／2019•8•21

# キリシタンの時代

## はじめに

◎現時点の「世界の宗教の人口」。（『生活の知恵』2018.1.1号）

1．キリスト教　32%
2．イスラム教　23%
3．ヒンズー教　15%
4．仏　　教＋　7%
　　77%

なお、日本におけるキリスト教の人口は１％前後といわれる。信者数は少ないが、教育上では、大きな位置を占めている。日本人全体の約１割が、何らかの意味でキリスト教教育機関の出身者であることが判明している。

◎2018年６月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録された。本日は、その世界遺産の一つである長崎の大浦天主堂にまつわるエピソードから始めることとする。

## 「信徒発見」

1858年（安政５）、修好通商条約（対米、英、仏、露、蘭）の締結を機に、外国人の居留地内の信教と礼拝の自由が認められることになった。長崎では、居留フランス人のため、長崎に大浦天主堂の建立が進められ、1864年に落成する。翌年、献堂式が行われてから１カ月たった３月17日のことであった。

パリー外国宣教会から派遣されたプチジャン神父が天主堂で祈りを捧げていると、「あなたと同じ心です」と話しかける女性がいた。「あなたの信仰する心と同じです」という意味である。さらに、女性は天主堂内のマリア像のある場所をたずねてくる。神父は「サンタ・マリア」という言葉を聞いて確信した。彼女はこの250年間、親から子に、密かに、しかし、確実に伝えられてきた「キリシタン」に違いない。キリシタンとはポルトガル語でローマ・カトリック教、あるいはその信徒のことであるが、神父は全身、雷に打たれたような感動を覚えた。見ると、彼女のほかに十数名が一緒だった。

「あなた方はどちらから」とたずねると、「私たちは浦上の者です。浦上はみなキリシタンです」。
神父は飛び上がるような喜びを感じ、全員を聖堂に導き入れ、祈り合った。長い間、捨て忘れていた子供たちが、親を慕って帰ってきたのと同じ心境であった。

女性はイザベリナ杉本ゆり（52歳）。この出来事は、「信徒発見」として伝えられているが、この出会いは神父による信徒の発見ではなく、信徒たちによる神父の「発見」といえるかもしれない。

その後、浦上だけでなく、五島、天草などに住む信徒の指導者たちが続々と神父の元を訪ねて指導を願った。神父は密かに彼らを指導し、彼らは村に帰って神父の教えを広めた。

## キリストの生誕と新約聖書



キリスト教は、ユダヤ教（教典は「旧約聖書」）から派生した。本来、イエス・キリストはユダヤ教徒であった。紀元前４年ごろ、パレスチナのナザレに生まれ、紀元30年ごろ十字架にかかる。この“宗教家”を「神の子」「救世主」と仰ぐのが、キリスト教の基本モチーフである。

「キリスト」とは苗字ではない。新約聖書の言語であるギリシャ語のクリストス（ハリストスとも聞こえる）という語を、キリシタン時代に南蛮訛りで日本語化したものである。このクリストスは、ヘブライ語の「メシア」を訳したものだ。意味は、「油塗られた者」（＝ユダヤ人を解放する救世主）。当時のユダヤ人も「まっとうな」人間が報われない世の中の不正義にうんざりしていた。イエスの支持者たちは、彼がキリスト、すなわちメシアであることを望んだ。すなわち、イエスは当初、ローマ帝国の支配下にあったユダヤ民族の救世主として期待されたのであるが、政治的な救世主というより、むしろ精神的な救世主として変容しはじめ、次第に支持者を増やしていった。

やがてイエスの言行をもとに記録がつくられる。「新約聖書」である。その言行録も、まとめた人の立場や視点の相違により、もっとも古いとされるマルコの名を冠するもの、それと少なからず資料を共通するマタイ、ルカの名を持つもの、この３著とはかなりの点で違いを見せるヨハネの名を持つもの、まず、この４著が作られた。これが４福音書（イエスの言行を記したもの）として、ほぼ今日のかたちをとるのは２世紀ごろとされる。

## ローマ帝国の国教に

こうして信徒を増やしていったキリスト教は、当初はローマ帝国から激しい弾圧と迫害を受ける。しかし、その勢力は無視することができないものとなり、ついに４世紀末、何とキリスト教はローマ帝国の国教として認められるのだ。

その後、キリスト教は東方諸教会と西のローマ教会との対立が激化、1054年、両者は分裂する。東方教会は、ギリシャ正教会、ロシア正教会、ルーマニア正教会などとして、現在まで地道に活動している。

## 宗教改革とイエズス会

14世紀から16世紀にかけて、「ルネサンス」と称される古典文芸の復興ムードが高まる。その有するヒューマニズム精神が、全欧的に、キリスト教にも影響を及ぼした。
推進力となった一人が、ドイツのマルチン・ルターである。ローマ教会は財政的な疲弊から免罪符を販売するなど、聖職者の堕落が横行、ルターはこれを激しく批判。グーテンブルグの発明した（1445年ころ）金属活字式印刷機を活用して、宗教改革運動を推進した。

加えて、スイスに生まれたジャン・カルバンによっても改革が進められた。ルターやカルバンによって起こった宗教改革運動は、ローマ・カトリック教会に抗議（プロテスト）する活動とみなされ、「プロテスタント」と呼ばれるようになる。

## カトリックの反撃－「対抗的宗教革命」

当時、イスラム教の進出もあり、これを防御するため、ローマ・カトリック教会側も「対抗的宗教運動」を起こした。なお、カトリックとはギリシャ語で「普遍的」という意味である。

1528年、留学中のパリ大学で出会ったイグナティウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエル、ピエール・ファーブルの３人。1540年、イエズス会を組織し、ローマ教皇から認可を

得ると、対抗的宗教改革の先兵の役を担う。プロテスタントに侵食された地域の信仰の回復と、地理上の発見によって見いだされた地域への伝道に、意欲的な活動を開始したのだ。

ロヨラも、ザビエルと同じバスク人で貴族の出身であった。ロヨラの発案で「戦闘的な」しかも真摯なカトリックの修道会である「イエズス会」を組織した。当初の有志は7名であった。

ところで、15世紀には、ポルトガルの航海者バスコ・ダ・ガマが、喜望峰経由でを東回りによりインドに至る航路を開拓して以来、領土と香辛料（主にコショウ）を獲得しようと、ポルトガル、スペインをはじめ西洋諸国の「東漸」が盛んになった時機であった。

ローマ・カトリック教会の伝道は、政治的な進出と帯同するかたちで進められた。ローマ教皇（きょうおう、きょうこうとも）は、海外伝道に対し、スペインやポルトガルの国王に、その伝道を支援するという「布教保護権」を与えた。そのため、海外の伝道地はそのまま両国の領土と同一視された。

## ザビエルの来日

ポルトガルは、1510年にインド西海岸のゴア、翌年マレー半島のマラッカを征服してキリスト教化を行い、布教の拠点とした。

1542年、インドに到着したイエズス会のフランシスコ・ザビエルはポルトガルが国家として遠征したルートとほぼ同じコースをたどって、各地で宣教に励んだ。1549年には、鹿児島に上陸し、日本で初めてキリスト教を伝えることになる。

当時、創設早々のイエズス会。会士たちの戒律や、教義上の厳格さは、軍隊の制度を思わせるほどであった。加えて、とくにザビエルは、貴族の流れを汲む階層の人間であった。実直で沈着、しかも学識と勇気のある人物であった。並外れた胆力の持ち主でもあったに違いない。この遠い地から東洋のはずれまできて、相手にとってはまったく未知な宗教を広めようというのだ。

なお、前述の通り、ザビエルは、ポルトガル人でもフランス人でもない。バスク人である。バスクとは、ピレネー山脈の西部、フランスとスペインにまたがる地域のこと。系統不明の独自の言語と独特の風習を持つバスク人が居住している（言語人口50～60万人）。バスク人の国籍は両国に別れて所属しているが、今も分離・独立運動が根強く伝わっている地域である。イエズス会を起こしたロヨラもたまたまバスクの貴族の出身であった。

ザビエル城が現存している。この城は、ザビエルの母親が父親と結婚するとき「嫁入り道具」として持参したものだが、父はこの地域の王国である「ナバラ国」の宰相であった。幼時、ザビエルはこの城で養育されたのだろう。

## ザビエルの布教

ザビエルは天皇の宣教許可を得ようと、鹿児島から平戸・山口を経て京にたどり着くが、当時の京都は戦乱で寂れきっていた。天皇の権威も失墜しており、将軍も不在であったため、ザビエルは目的を果たせなかった。その後、ザビエルは再び山口、九州などに戻って、言語や文化の違いなどを乗り越えながら徐々に日本人協力者や理解者を得ることができ、700名ほどに洗礼を授けた。



彼が数々の苦難を超えて日本に伝えようとしたものは何だったのか。『日本キリスト教史』によると、ザビエルは『新約聖書』マタイ傳にあるイエスの言葉「たとえ全世界を手に入れても、自分の魂を失ったならば、なんの益になろうか」そのものであったという。魂を失うとは、罪を犯すことであり、罪とは、「自己愛」であるとされる。

## ザビエルの本音

ザビエルの背後にある国家の国威や国力、経済的な利益の追求が認められるにせよ、ザビエル自身の本音としては、経済的な面よりも、精神的、宗教的な動機に重点を置いていたようだ。

彼は各地を旅する中で、日本文化に中国が大きな影響を与えていると気づき、中国での布教を志して中国に移ろうと広東に上陸したが、中国本土を目前に病没した。彼が日本にいたのはわずか2年であった。

日本人を、「世界で最も優秀で理性的な国民」であると評価したザビエルは、イエズス会本部にさらなる宣教師の派遣を要請。それに応えて優秀な人材が積極的に日本に送られた。

また、ザビエルは日本の首都に神学部・法学部・医学部を備えたカトリック系の総合大学を見学する夢を抱いていたが、その夢は遠く大正2年（1913）、イエズス会によって上智大学が東京に創設されたことによってかなえられた。なお、上智大学には医学部は設置されていない。

## ザビエルの去った後

ザビエルが日本を去った後、イエズス会本部からは120名もの宣教師が派遣され、引き続き、まさに命を懸けて布教に努めた。

イエズス会は、日本語の『日葡（にっぽ）辞書』をつくり、また、要所にセミナリオ（ゼミナール。神学校）、コレジョ（カレッジ。宣教師養成学校）、南蛮寺（教会）などを設ける。ポルトガルとの交易にも期待した九州の諸大名たちは、キリスト教に改宗し、それに続いてその領民たちが続々それにならう。勢いは　さらに中国・近畿・中部・北陸・関東など各地へと広がっていった。まさに燎原の火のごとくであった。

日本人の心はほんとうの宗教に飢えていたのであろうか。人生の意義は何か、真理の本源はいずこにあるのか。全国のキリシタン信者数は30万人に達していたという。あるいは60万人とも70万人ともいわれる。受洗した大名とその妻の一覧表は別紙の通りである。これほど多くの大名の名前が見えるというのは、イエズス会の普及戦術が日本のエスタブリッシュ階級（支配階級）に狙い定めていたためでもあった。

九州の大友、有馬、大村をはじめ高山右近などはともかく、まったくキリスト教には関係がなさそうな黒田官兵衛こと如水（孝高。よしたか）までが入信している。如水は、1585年ごろ、高山右近や蒲生氏郷らの勧めによって入信し、教会の建設にも多額を寄付している。

## 時代的な背景

キリスト教は仏教と同じく、海外から伝来した外来宗教である。しかし、キリスト教はとりわけ異質性を帯びた宗教であった。

第一に伝来の仕方を見ても、隣国の中国や半島からきた仏教とは異なり、西洋の国から顔かたちの異なる宣教師によって伝えられた宗教である。積極的な布教の形態をとっている上に、教えの内容も異質である。このようなキリスト教が、当時の日本人になぜ受け入れられたのだろうか。

そのころの日本。政治的には守護大名の台頭による室町政権の崩壊期。経済的には、荘園制が崩れ、大名による城下町の形成が見られ始めていた。社会の変革期であったのだ。
そんな社会に生きる人たちは、応仁の乱をはじめ戦乱と、流通機構の変化や、相次ぐ天災などにより困難と混乱の最中に置かれていた。その反映が一揆の頻発である。精神的に「下克上」の風潮があり、秩序の混乱のなかで、不安に包まれていた。

人々が頼りにしたい宗教である仏教は、あるいは政治勢力と化し、あるいは為政者の御用宗教と化して、人々の救済にはほとんど無力であった。そこに登場したのがキリスト教である。宗教改革による失地を回復するため、使命観に燃えた宣教師たちが、まず、前に述べたように支配者の地位にあるものを改宗させることにより下に及ぼすという、大量改宗の方法がとられた。そのため、交易の利益を望む大名クラスへの接近が試みられた。また、一般庶民に対しては、社会事業による物質的救済を施すとともに、信心講を組織して、信徒間の相互援助が奨励されたのである。

**高山右近の場合**
キリシタン大名のなかで、たとえば高山右近。摂津高槻、のちに明石６万石の藩主となった大名である。

1564年（永禄７）、11歳のとき受洗する。父・ダリオとともにキリスト教を信じ、家臣を学ばせるためセミナリオを造り、神の前には人は平等であることを徹底し、高槻・安土・大坂などに聖堂を建立するなどの伝道活動を行った。家臣に対する思いは深く、領民の葬式にも自ら列席したという。茶人であり、性いたって剛勇堅忍、人徳の人、軍略・築城にもすぐれていた。

小牧・長久手の戦い、四国征伐、中国征伐などに参戦。山崎の戦いでは明智光秀を敗走させる。また、1590年の小田原征伐では、すでに秀吉の命令で追放されているにもかかわらず、前田利家軍に加わり、八王子城攻略に参戦している。

右近は、「お前がお前自身を愛している以上に、神はお前を愛しているのだ」という言葉を信じていた。時間はさかのぼるが、1577年（天正５）には１年間に4000人の高槻の領民が洗礼を受けている。1581年（天正９）には、自ら強制しないにもかかわらず、領民２万5000人のうち１万8000人が洗礼を受けたという。

**秀吉のバテレン追放令**
1587年（天正15）、秀吉が九州平定のため、当地を訪ねると、長崎の地が領主の大村純忠によって（当時は単なる寒村であったが）イエズス会に寄進されてしまっているのを見た。まさに「バテレン」領のようになっているのだ。バテレンとは、「パードレ」、宣教師のことである。

為政者の秀吉にとっては、天下統一を目指す戦略上、きわめて由々しい大問題であった。当初は、織田信長に次いで秀吉もバテレンたちを保護し、あるいは、彼らへの関心は薄かったが、秀吉はキリシタン禁制政策に傾くのだ。



同年、秀吉は「バテレン追放令」を発令する。「日本は神国であるのに、キリシタン国から、邪法を伝えたのは、けしからん」。

**再び高山右近のこと**
そこで、右近に対しては、秀吉は、「余に仕えたければ信仰を捨てよ」との指示を下す。右近の答えは簡単明瞭、潔かった。「たとえ全世界を与えられようとも、信仰を捨てようとも思わぬし、自分の霊魂の救済と引き換えることはしない。わたしの身柄、俸禄、領地については、殿（秀吉）の気に召すようにとり計らわれたい」。

茶道の師匠である千利休の説得も謝絶して、右近は流浪の旅にでる。右近は、黒田如水や蒲生氏郷を受洗させるほど彼らと親密で、また、細川忠興や前田利家たちとも友誼を結んでいた。受洗仲間の小西行長の世話で小豆島や肥後に人目を避け、次いで金沢に行き、「客将」として利家から１万5000石の扶持を受けていたが、江戸期に入り1614年、ついに家康によって右近はマニラに国外に追放された。

マニラでは官民の大歓迎を得たが40日後、熱病で死去する。葬儀は10日間を要した。

「妻や娘、孫はキリストのため追放された私とともにここにきましたが、神が彼らにとって真理の父となりたもうでしょう。だから、私がいなくなってもよいのです」。
と彼は言い残した。右近は教義に生きとおしたのである。

**サン・フェリーペ号の情報と「26聖人殉教事件」**
1596年、マニラからメキシコに向かうスペイン船（サン・フェリーペ号）が土佐沖に漂着し、その乗り組み員たちは取り調べを受けた。
「宣教師の派遣は、日本を侵略するための準備行動であり、この後、スペインは軍隊を派遣して日本を征服する」
船員の一人が放言したという。これを聞いた秀吉の怒りが火を噴く。

秀吉は、はじめ「都や大坂にいる宣教師や日本人信者たちを全員磔に処するから、名簿をつくれ」と当時の奉行・石田三成に命じた。ところが案に相違して、キリシタンの数はたちまち3000人を超えてしまった。三成は大いに困惑したに違いない。全国では大変な数に上っていたであろうからだ。

結局、畿内にいたフランシスコ会の宣教師を中心とするキリシタン26名が逮捕される。
1592年以来、ポルトガルを支配下に置いたスペインであったが、そのスペインをバックとするフランシスコ会も日本での布教に参入していたのだ。

スペイン人４名、ポルトガル人、メキシコ人など外国人６名以外は一般の日本人。1597年１月、耳をそがれた26名は、大坂から長崎まで880キロの真冬の道を歩かされたが、脱落する者は一人もいなかった。道中、日本人の信者は後ろ手に縛られたまま神の道を説き続けたという。
全員が十字架に架けられた。後世「聖人」の列に加えられ、全員の碑は長崎市内に建てられている。「26聖人」の殉教事件である。

**徳川幕府の「鎖国令」**
1603年、天下を統一した徳川家康も当初は通商交易による利益を考慮し、宣教師たちと

の関係を断ち切ることはしなかった。

ところがキリシタン大名の一部に賄賂事件が露呈する。これをきっかけに1614年（慶長18）「バテレン追討令」を発する。やはり、仮に、キリスト教の信仰姿勢に感心すべきものを見たとしても、堅固な主従関係・君民関係をつくりあげようとしている家康とすれば、ガバナンス上の基本問題として、キリスト教への対応をゆるがせにできないと判断したのである。

全国の教会の破壊、宣教師の国外追放が行われ、1616年にはキリスト教禁止のうえ、外国船の入港を平戸と長崎のみに限った。

以後、宣教師や信徒の逮捕と処刑が各地で進行した。 鎖国体制は、1639（寛永16）のポルトガル船の入港禁止、1641年、オランダ人を出島に移すことにより一応完成する。オランダ船・中国船の来航は、長崎のみに限られ、交易は江戸幕府の支配下に置かれた。出島を通じ、オランダのみとの間にせよ、一筋の通路を設けたことから世界への窓口は辛うじて守られた。

なお、オランダが日本への交易を許されたのは、1581年に大国・スペインから独立したばかりで、しかも宗教的にはプロテスタントの国。カトリック国のポルトガルやスペインのように日本に布教しにくるおそれはまったくないと見なされたのだ。

**島原・天草一揆（島原の乱）の発生**

1637年（寛永14）、島原の乱が発生する。10月、松倉勝家が領有する島原半島と、これに呼応するかのように唐津の寺沢堅高（かたたか）が支配する天草諸島の住民、併せて3万7000人（2万ほどとか3万ほどとか）が藩をこえ、大規模な一揆を起こしたのだ。両地域にはキリシタンが多く住んでおり、とくに天草にはメシア待望思想があって、少年・天草四郎をリーダーとして擁立、彼のもとに反体制的な浪人や農民が結集した。

一揆は島原半島の原城に籠城。大接戦の末、翌年2月、老中・松平信綱率いる幕府の鎮圧軍に制圧される。信綱は、長崎の出島にいたオランダ船にも、海上から原城への砲撃を要請した。

一揆の鎮圧と権威の保持のため、幕府は、エースともいうべき老中・松平信綱（「千恵伊豆」と呼ばれた）まで派遣しなければならなかった。

なお、この一揆を、領主の苛斂誅求に対する農民一揆と見るか、宗教一揆と見るかは議論が分かれるところである。

この一揆が鎮圧されてから島原の領主・松倉勝家は斬罪となり、天草の寺沢堅高は領地没収の幕府裁定を不満として自害し、お家断絶となった。一揆の処理をめぐって打ち首の刑を受けた大名は、徳川幕府では唯一のことであった。

ところが、幕府は一貫して島原の乱は、宗教一揆であるとの見方をとった。幕府は、その後のキリシタン弾圧のため、この一揆をも利用したのである。それほど、幕府はキリシタンの根絶に力点を置いていたのだ。

**ますます強化されるキリシタン弾圧**

島原の乱を鎮圧した幕府は、ますますキリシタンの検挙と弾圧を徹底的に強化した。発見した信徒の改宗を進め、監視は数代のちの子孫にまで及んだ。



さらに、五人組（近隣の住民5戸を一組とする末端の行政組織、連帯責任を旨とし、法令順守、治安維持を主目的とした）、宗門改め、寺請証文（檀那寺が檀徒に対して発行する一種の身分証明書）の徹底、仏寺への帰属と、葬儀における仏僧の立ち会いなどが制度化された。

また、キリスト像への踏絵が行われ、信徒の摘発には懸賞金までつけられた。

「踏絵」とは、信者か否かを見分けるため、キリストや聖母マリア、十字架などの像を金属や木製の板に刻み、足で踏ませることである。

九州地区のキリシタン弾圧、逮捕、処刑の責任は長崎奉行所が負っていたが、同奉行所では、踏絵の貸し出しまで行っていた。

**隠れキリシタン**

キリシタン弾圧強化の方針は大筋において成功したが、それでも日本のキリシタンは根絶されるには至らなかった。さまざまな方法で摘発を逃れた信徒がいたのだ。その一つが「隠れキリシタン」となった人たちであった。

「隠れキリシタン」とは、禁制に抵抗して、表面的には仏教徒を装いながら、密かにキリストを信じ続けた人々のことである。

ところが、教会と牧師を欠いた隠れキリシタンの信仰は、次第に土俗的なもの、いいかえれば、日本的なカミ信心の様相を交えてきて、ローマ教会のキリスト教ではなくなってゆく例が見られる。しかし、本講の冒頭で紹介した、プチジャン神父に名乗り出た浦上の信徒のような人たちもいたのだ。

なお、「隠れキリシタン」とは通称であって、「潜伏キリシタン」と表現するのが正しい。明治6年の「高札撤去」によるキリシタン解禁後も、教会に復帰しない人々のみを隠れキリシタンと呼ぶ、という説もある。

キリシタン史では、隠れキリシタンが発見されて逮捕される事件を「くずれ」と呼んでいる。

「くずれ」の代表的なものを挙げると、1657年(明暦3）の大村藩の「郡（こおり）くずれ」、1660年（万治3）の「豊後くずれ」、1661年（万治4）「美濃くずれ」などがあり、いずれも数百名のキリシタンが逮捕されている。

これら「くずれ」のうち、例えば、「郡（こおり）くずれ」では、608人が検挙され、そのうちの411人が斬罪の刑に処された。牢内で病死した者は78人に達している。病死というより苛酷な扱いによる虐待死と見られる。遺体は焼かれて海に捨てられ、牢を出ることのできた者は100人あまりであった。

**プロテスタントの来日と禁教令の解除**

1858年（安政5）、各国と修好通商条約が結ばれると、居留地における信教の自由と礼拝が認められるようになった。公式に海外の宣教師の渡来が始まり、アメリカからS・R・ブラウンやJ・C・ヘボンらを筆頭に、プロテスタントの宣教師が、医師や教師の経験や技量などを携えて、来日した。彼らの使命は一義的には、日本人に神の言葉を伝え、教会を

建設することであった。さらに冒頭述べたように、教育機関を設け、日本の子女に教育を施すことにあった。

しかし、実質的に、しぶしぶながらも日本国民に対する信仰の自由が許されたのは、明治6年になってからであった。しかも、この旨を公知したのは、禁教を伝える高札の表示を取り下げるといった方法のみであった。キリスト教に対する無関心さの度合いにおいて、明治新政府は、旧幕府と大同小異であった。

**遠藤周作『沈黙』について**

ところで、遠藤周作に『沈黙』という小説がある。1966年出版。17世紀の日本の史実に基づいて書かれた歴史小説である。

江戸時代初期のキリシタン弾圧の渦中に置かれたポルトガル人の司祭を通じて、神と信仰の意味を描いた、キリスト教文学の傑作である。世界13カ国語に翻訳され、フランスの作家グレアム・グリーンに「遠藤は20世紀のキリスト教文学で最も重要な作家である」といわしめたのをはじめ、戦後日本文学の代表作としても高く評価された。2回、映画化され、1971年（篠田正浩監督）と2016年（マーチン・スコセッシュ監督）、ともに名作と評価された。小説のあらすじは、以下のとおりである。

島原の乱が沈静化したころ（1638年）、とんでもないニュースがローマに届く。信仰心の卓越したフェレイラ神父が日本で棄教したというのだ。「棄教」とは、キリスト教徒が、信じていた信仰を棄てることである。特に神父という立場にとっては異常なことであった。一体何が起こったのか。

事情を探るため、神父の高弟である司祭のロドリゴは、五島列島に潜入する。いうまでもなく、日本は鎖国されており、禁教の状況であった。

やがて、ロドリゴ自身が長崎奉行所の追跡の的になる。窮状のなかで、フェレイラ神父に会うことができる。しかし、フェレイラにはもはや信仰の残り火さえ見当たらない。

「この国はすべてのものを腐らせてしまう底無し沼だ」とフェレイラはいう。棄教した彼は幕府から重用され、死刑になった男の妻子をあてがわれ、名前も日本名を名のらされていた。ロドリゴは「もうあなたは私の知っている神父ではない」と吐き捨てる。

一方で、ロドリゴは神の奇跡と事態の好転を祈る。しかし、神は沈黙したままである。実際、フェレイラはロドリゴに対し、「自分が転んだのは、神が何一つ、なさらなかったからだ。必死で祈ったが、神は何もなさらなかったからだ」と告げていた。

後、虚を突かれたように、ロドリゴは追い手に捕まる。内密する者がいたのだ。

捕えられた牢内で、彼は夜な夜な奇妙な音に悩まされる。フェレイラによれば、それは棄教者たちの呻き声である。穴吊りの拷問を受けているのだという。ロドリゴが棄教しないから、棄教者たちが相変わらずの拷問を受けているというのだ。ロドリゴは悩んだ。

彼が棄教しないと、棄教者たちが苦しむことになる。ロドリゴは棄教を決意した。長崎奉行のもとに行くと、「銅版」が置かれている。憧れ、崇め、礼拝を重ねてきたキリストの像が彫られている。描かれた像は、もはや擦り減ってしまっている。

既に多くの信者が殉教しているが、自分も殉教を目的として日本に潜入してきたのだ。



その日本で、自分はキリストを裏切ることになる。踏めば、足に激痛が走り、心は死ぬ。

ロドリゴはそのとき、かすかな声を聞いた。

「いいのだ。踏むがよい。お前の足の痛みは、私が一番知っている」。

空耳のようにも思えた。しかし、声はなお続く。

「いいのだ、ロドリゴ。私はお前たち人類の罪と弱さのために十字架についたのだ。踏むがよい。踏むがよい」「私は沈黙していたのではない。お前たちとともに苦しんでいたのだ」。

こうして、ロドリゴは棄教者の列に加わったのだ。

**遠藤周作というキリスト教信徒**

『沈黙』が出版された1966年当時、カトリック教会の一部から強い反発が寄せられた。長崎においては、同書は禁書に等しい扱いをされたという。司祭が踏絵を踏むという、衝撃的な結末を、こころよく思わないというのだ。

これに対する遠藤の、とくに棄教者に向ける思いは、以下のとおりであった。

「弱者も我々と同じ人間なのだ。彼らが、それまで自分の理想としていたものを、この世でもっとも善く、美しいと思っていたものを裏切ったとき、涙を流さなかったと、どうしていえよう。後悔と恥とで身を震わせなかったと、どうしていえよう。その悲しみや苦しみに対して小説家である私は無関心ではいられなかった。彼らが転んだあとも、ひたすら歪んだ指をあわせ、言葉にならぬ祈りを唱えたとすれば、私の頬にも涙が流れるのである」。

遠藤は、きわめて優しい心の持ち主であった。彼が、カトリック教には男性より、むしろ母性を感じるという意味のことを記しておられるのを読んだことがある。その本心は、まさに、先のカトリックの聖職者の抗議への解答と同根なのであろう。

◎氏は大正12年、東京で生まれ、3歳のとき父の転勤で大連に移り、10歳のとき父母の離縁のため母親に連れられて神戸に戻ってくる。そのとき神戸に住んでいた伯母がカトリック信者だったために、遠藤少年も母親と一緒に教会に通うことになり、やがて11歳で母親とともにカトリックの洗礼を受けることになる。「もし、あのとき、私が別の境遇にあったなら洗礼を受けなかっただろう」と後に書いておられる。遠藤氏は、信仰に対するポイントを示しておられる。

「だれの心にも、仏教でいう阿頼耶識（あらやしき。知覚や認識などの諸意識の根底にある意識）があり、だれの心の奥底にもキリスト教でいう魂というものがあるとすれば、そこで働いているXを感じるか、感じないかということが、信仰の出発点だと思います」。

平易な文章で（常にそうなのだが）信仰への近づき方を説いておられるのだ。

◎『沈黙』は、聖書の「マタイ傳」に書かれたイエスの言葉からテーマを引いてきた作品であると思う。イエスが祭りの日、エルサレムを訪ねた際、熱狂的な群衆に大歓迎を受ける。イエスの人気を妬んだユダヤ教の聖職者と、熱狂した群衆による暴動の発生を恐れたローマ帝国の総督によって逮捕され、イエスは十字架に架けられる。十字架の上で、イエスは叫ぶ。

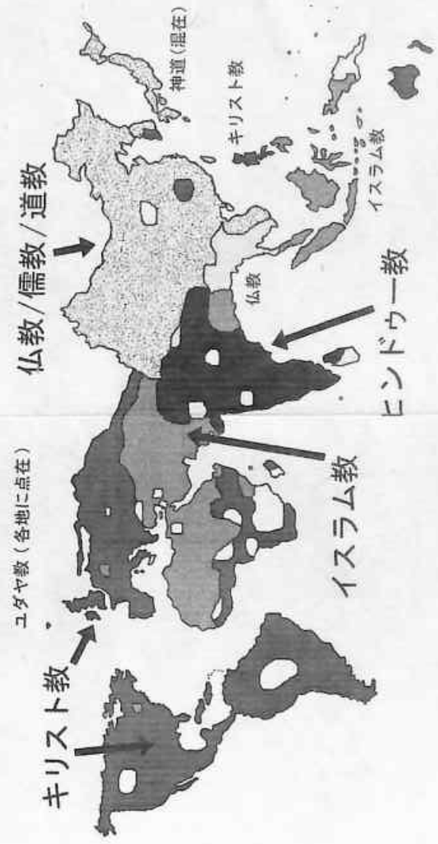
「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。意味は「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

「もう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた」と聖書にある。このイエスの叫びへの遠藤のキリスト信者としての答えが、『沈黙』なのだと思う。

有禁所に赴き 書ほうを 3年くらいで まとめる

## キリシタンになった大名とその妻一覧表

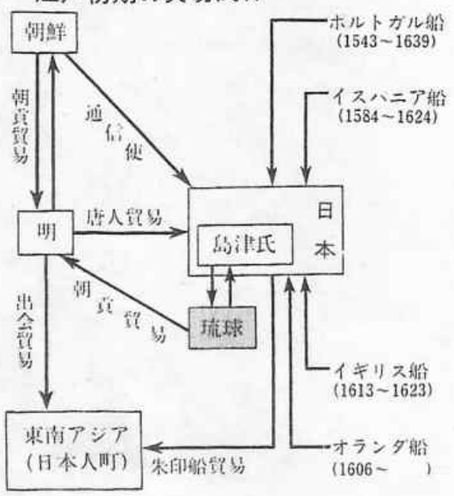
| 洗礼年 | 名前 | 洗礼名 | 領地 |
|---|---|---|---|
| 1553 | 能手田　左衛門尉 | アントニオ | 平戸、生月 |
| | 一部　勘解由 | ジョアン | 平戸、生月 |
| 1563 | 大村　純忠 | バルトロメウ | 大村 |
| | 高山　飛騨守 | ダリオ | 高槻 |
| | 高山　右近 | ジュスト | 高槻、明石 |
| | 結城山城守　忠正 | エンリケ | |
| | 結城　左衛門尉 | アントニオ | 岡山（河内） |
| 1564 | 結城　弥平次 | ジョルジ | 愛藤寺城、金山城 |
| | 結城 | ジョアン | 岡山（河内） |
| | 地田　教正 | シメオン | 八尾（河内） |
| | 伊智地　文太夫 | パウロ | 烏帽子形城（河内） |
| | 三木　半太夫 | パウロ | |
| | 三箇　伯耆守 | サンチョ | 三箇（河内） |
| | 三箇　頼述 | マンショ | 三箇（河内） |
| | 小西　隆佐 | ジョーチン | 堺津 |
| | 小西　行長 | アゴスティニョ | 宇土（肥後） |
| 1566 | 加賀山　隼人 | ディオゴ | |
| 1568 | 志岐　麟泰 | ジョアン | 志岐（天草） |
| 1568 | 五島　純発 | ルイス | 福江（五島） |
| | 五島　玄雅 | ルイス | 福江（五島） |
| | 内藤飛騨守　忠俊 | ジョアン | 丹後、亀山 |
| 1570 | 大村　喜前 | サンチョ | 大村 |
| 1571 | 天草　種元 | アンドレス | 本渡城 |
| | 天草　尚種 | ミカエル | 天草 |
| 1575 | 島山　高政 | | 高谷 |
| 1576 | 一条　兼定 | パウロ | 土佐 |
| | 一条　内政 | | |
| | 天草　久種 | ジョアン | 天草 |
| | 有馬　義貞（義直） | アンドレス | 有馬 |
| | 安富　徳円 | ジョアン | 有家城 |
| 1578 | 大友　義鎮（宗麟） | フランシスコ | 豊後 |
| 1580 | 有馬　晴信 | プロタシオ・ジョアン | 有馬 |
| | 京極　高吉 | | 近江 |
| | 京極　室 | マリア | |
| | 前田　秀則 | パウロ | 丹後、亀山 |
| | 前田　茂勝 | コンスタンチノ | 亀山 |
| | 織田　秀信 | ペトロ | 岐阜 |
| | 織田　秀則 | パウロ | |
| | 松浦　隆信 | | 平戸 |
| 1596 | 明石　掃部 | ジョアン | |
| | 津軽　信枚 | ジョアン | 津軽、弘前 |
| | 関　右兵衛 | パウロ | |
| | 蒲生　郷成 | ジョアン | |
| | 木村　重茲 | | |
| | 寺沢　広高 | アゴスティニョ | 唐津 |
| | 蜂須賀　家政 | | 徳島 |
| | 京極　高知 | ジョアン | 宮津 |
| 1598 | 大村　純頼 | バルトロメオ | 大村 |
| 1601 | 宇喜多　休閑 | トメ | |
| 1602 | 宇喜多　秀隆 | | 岡山 |
| | 京極　高次 | | 小浜 |
| 1604 | 宇喜多　秀家室 | マリア | |
| | 木下　茉 | ペトロ | |
| 1607 | 津軽　信建 | | 津軽 |
| 1620 | 前田　（？） | イグナシオ | |
| | 能手田　左衛門尉 | アントニオ | 平戸、生月 |
| | 一部　勘解由 | ジョアン | 平戸、生月 |
| 1553 | 大村　純忠 | バルトロメウ | 大村 |
| 1563 | 高山　飛騨守 | ダリオ | 高槻 |
| | 高山　右近 | ジュスト | 高槻、明石 |
| | 結城山城守　忠正 | エンリケ | |
| | 結城　左衛門尉 | アントニオ | 岡山（河内） |
| 1564 | 結城　弥平次 | ジョルジ | 愛藤寺城、金山城 |
| | 結城 | ジョアン | 岡山（河内） |
| | 地田　教正 | シメオン | 八尾（河内） |
| | 伊智地　文太夫 | パウロ | 烏帽子形城（河内） |
| | 三木　半太夫 | パウロ | |
| | 三箇　伯耆守 | サンチョ | 三箇（河内） |
| | 三箇　頼述 | マンショ | 三箇（河内） |
| | 小西　隆佐 | ジョーチン | 堺津 |
| | 小西　行長 | アゴスティニョ | 宇土（肥後） |
| 1566 | 加賀山　隼人 | ディオゴ | |
| 1568 | 志岐　麟泰 | ジョアン | 志岐（天草） |
| 1568 | 五島　純発 | ルイス | 福江（五島） |
| | 五島　玄雅 | ルイス | 福江（五島） |
| | 内藤飛騨守　忠俊 | ジョアン | 丹後、亀山 |
| 1570 | 大村　喜前 | サンチョ | 大村 |
| 1571 | 天草　種元 | アンドレス | 本渡城 |
| | 天草　尚種 | ミカエル | 天草 |
| 1575 | 島山　高政 | | 高谷 |
| 1576 | 一条　兼定 | パウロ | 土佐 |
| | 一条　内政 | | |
| | 天草　久種 | ジョアン | 天草 |
| | 有馬　義貞（義直） | アンドレス | 有馬 |
| | 安富　徳円 | ジョアン | 有家城 |
| 1578 | 大友　義鎮（宗麟） | フランシスコ | 豊後 |
| 1580 | 有馬　晴信 | プロタシオ・ジョアン | 有馬 |
| | 京極　高吉 | | 近江 |
| | 京極　室 | マリア | |
| 1582 | 伊東　祐勝 | ジェロニモ | |
| | 伊東　義賀 | バルトロメオ | |
| | 伊東　祐兵 | | 佐土原 |
| 1584 | （森）毛利　高政 | | 佐伯 |
| | 牧村　兵衛 | | 岩手（伊勢） |
| | 黒田　孝高 | シメオン | 中津 |
| 1585 | 蒲生　氏郷 | レオ | 伊勢、松坂、会津若松 |
| | 志賀　親次 | パウロ | 岡城 |
| | 薄田　佐馬丞 | | 近江 |
| | 市橋　兵吉 | | 美濃 |
| | 安威　藤治 | シモン | 高槻 |
| 1586 | 有馬　直純 | ミゲル | 有馬 |
| | 毛利　秀包 | シモン | 久留米 |
| | 黒田　直之 | ミゲル | 秋月 |
| | 織田　信秀 | ペトロ | 美濃、岩村 |
| | 溝谷豊前守　元直 | メルキオル | 三人城（安芸） |
| 1587 | 細川　玉 | ガラシャ | |
| | 黒田　長政 | ダミアン | 福岡 |
| | 大友　義統 | コンスタンチノ | 豊後 |
| | 大友 | フルジェンシオ | |
| | 大矢野　種基 | ヤコベ | 大矢野（天草） |
| | 栖本　親高 | ジョアン | 栖本（天草） |
| 1588 | 西郷　純信 | | 諫早 |
| 1589 | 栖本　八郎 | ジョアン | 栖本 |
| 1590 | 上津浦　重貞 | | 上津浦（天草） |
| | 宗　義智 | ダリオ | 対馬 |
| 1591 | 志岐（有馬）　諸経 | | 志岐 |
| 1592 | 筒井　定次 | | 伊賀上野 |
| 1595 | 細川　興元 | | 常陸、谷田部 |
| | 筑紫　広門 | | 山下城、筑後 |
| | 宇喜多　左京亮 | パウロ | 津和野 |
| | （坂崎　直盛） | | |

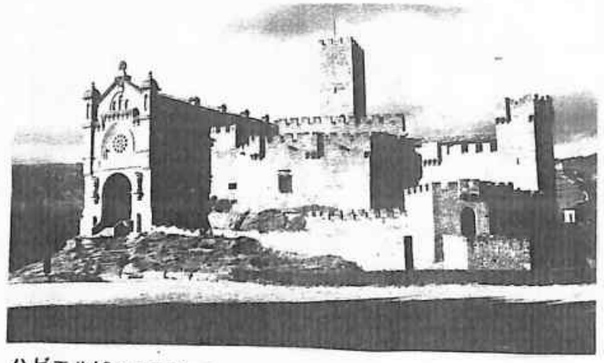



国別人口比で描いた宗教地図

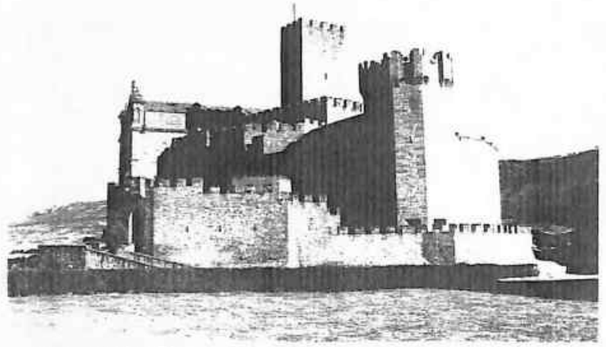
フランシスコ・ザビエル

江戸初期の貿易関係





ハビエル城の正面全景



ハビエル城の側面

天草四郎像（原城趾）

マリア観音　マリアに見立てて祀った

マリア像を描いた踏絵

「信徒発見」につながったマリア像

創建時の大浦天主堂

大浦天主堂の礼拝堂